

石製模造品

● 早野 浩二

本稿は、県内から出土した石製模造品の集成結果を提示し、個別地域におけるそれらの展開過程の追求を目的として、若干の考察を添えたものである。考察部分においては、集落から出土した石製模造品を主要な分析対象として、それらが定着、盛行、衰退する時間的な流れを整理した。さらにこれを受けて、石製模造品（滑石製品）出土古墳の編年、石製模造品の流通と保有形態の把握に向かう見通しを示した。

はじめに

近年、自身に対して県内の石製模造品に関わる機会が二度にわたって与えられた。愛知県史編纂さん事業に係る祭祀遺物についての概説（早野 2005）と、埋蔵文化財研究集会に係る滑石製品の基礎資料作成作業（埋蔵文化財研究会 2005）である。しかし、前者においては、祭祀遺物の全体把握という性格上、石製・土製模造品の集成作業を実施したものの、それに対する綿密な解説を加えることはなかった。また、作業期間の制約もあって、集成に遺漏が多いことも判明した。後者については、前者の遺漏を補いつつ、他の滑石製品をも網羅したが、それらの基礎資料に対して何ら問題を深めることはなかった。また、それらとは別に、かつて当センターにおいては、県内の遺構・遺物を集成し、研究の基盤を構築しようとする気運があった。そこで、今回の紙面を利用し、県内遺構・遺物集成として、石製模造品についての集成結果を提示する。さらにその結果を踏まえ、過去の集成作業において十分に深められなかった問題についても改めて詳述したい。

なお、今回の愛知県における集成作業を軸とした検討が意図するところについても若干触れておく。古墳出土の石製模造品については、白石太一郎によって組成の時期的変化が精細に論じられ（白石 1985）、河野一隆や北山峰生ら

によって刀子を中心とした石製模造品各種についても型式学的分析が深められている（河野 2002・2003、北山 2002 など）。集落出土の石製模造品については、篠原祐一によって石製模造品の詳細な型式学的分析も進められ（篠原 2005）、祭祀遺跡の石製模造品についても、福島県建鉾山遺跡における考察がよく知られている（戸田編 1998）。しかし、これらの各論においては、型式や年代が個別に論じられることが多く、白石や寺沢知子が、古墳、祭祀遺跡、製作遺跡を通じた年代の関係をすでに論じてはいるものの（白石 1985・寺沢 1990）、詳細な年代の把握には、なお検討の余地があるように思われる。

一方、石製模造品の詳細な年代把握を試みた所論として、田中新史による常総地域を主たる対象とした整理（田中 2002）、佐久間正明による福島県正直古墳群を対象とした分析（佐久間 2004）がある。これらは、個別地域における詳細な年代把握と、それを前提とした地域展開を論じる方向性が一定程度に有効であることを示している。

愛知県においては従来、石製模造品が定量出土した遺跡として、一宮市馬見塚遺跡が知られる程度であったが、近年、定量の石製模造品を出土する集落遺跡の調査事例が増加し、同時に石製模造品に共伴する遺物についての知見も増加した。これを受けて、土器編年（赤塚 1994、赤塚・早野 2001）を参考としながら、

集落出土の石製模造品の組成変化と各種の形態変化を見通すことも可能になりつつある。また、集落出土の石製模造品の年代決定が実現されれば、それとの対比を前提として、石製模造品を出土する古墳、あるいは同時に副葬される他の品目に対しても、土器編年を機軸とした相対的な年代を与えることも可能となるであろう。それは、白石や岩崎卓也（岩崎 1986・1987）らが論じようとした「古墳の祭祀と神まつりの同異」を、古墳と集落遺跡の双方向から同一の基準に即して論じるうえで欠くことのできない一義的な前提でもある。

1 県内出土の石製模造品

愛知県内の石製模造品は、過去に岩野見司、安達厚三、伊藤正人によって集成されている（岩野 1982、安達 1985、伊藤 1993）。なお、これらは石製模造品をはじめとする祭祀遺物全般、祭祀遺跡を扱った集成である。今回もこれら過去の集成を再構成した。試みに過去の集成作業と遺跡・遺物の件数を比較した結果を図 1 に示した。図 1 は、10 年前後を単位として、件数がほぼ倍加しつつ推移していることを表し、検討の機が熟していることをも示唆する。

古墳から出土した石製模造品（図 2）としては、一宮市野見神社古墳から出土した刀子 2 点（図 2—13・14）、豊橋市中野古墳から出土した刀子 2 点と滑石製石枕に伴う立花（同 15

～20、現在は石枕のみを愛知大学が保管）が知られているのみである。また、模造品ではないが、滑石製品としては、東海市兜山古墳に副葬された滑石製合子 1 点（同 1）、春日井市出川大塚古墳に副葬された勾玉 9 点（同 2～10）、名古屋市味鋺神社に伝わる琴柱形石製品 2 点（同 11・12、味鋺古墳群出土か）などが知られている。豊田市三味線塚古墳においては、周溝から有孔円板 1 点、勾玉 1 点、白玉 3 点が出土しているが、隣接する神明遺跡に関係する遺物と理解して、集落出土の石製模造品に含めて理解することとした。

集落出土の石製模造品として集成の対象としたのは、有孔円板、剣、勾玉、管玉、白玉、子持勾玉、紡錘車である。丸みを残した滑石製の勾玉、管玉、白玉については、模造品として同列に扱うことには問題があるが、出土状況に依拠して厳密に識別することが困難であると判断してあえて区別していない。紡錘車も実用品であろうが、模造品と材質を同じくすることに加えて、三重県石山古墳など、逆裁頭円錐形の紡錘車が石製模造品と同時に古墳に副葬される例があることから、参考として集成に加えることとした。結果、有孔円板を出土した遺跡 26 遺跡、剣を出土した遺跡 10 遺跡、勾玉を出土した遺跡 27 遺跡、管玉を出土した遺跡 8 遺跡、白玉を出土した遺跡 23 遺跡、子持勾玉を出土した遺跡 7 遺跡、紡錘車を出土した遺跡 28 遺跡をここに集成した（図 3・表 1）。有孔円板、剣、勾玉、白玉からなる 4 品目が確認される遺跡には、馬見塚遺跡、名古屋市志賀公園遺跡、同正木町遺跡、豊田市水入遺跡、同神明遺跡がある。

さて、馬見塚遺跡は、祭祀遺跡として紹介されることがあるが、祭祀のみを目的として遺跡が形成されたことが断定できないとする意味合いにおいて、ここでは祭祀遺跡としては扱わない。一方、石製模造品の製作に関与したと推定される遺跡、遺構の例は県内において知られていないので検討の対象とはしない。先述したように、古墳出土の石製模造品については、数量が少なく検討を深めることが難しいので、以下においては、集落において消費された石製模造品を中心に考察を加えることとする。

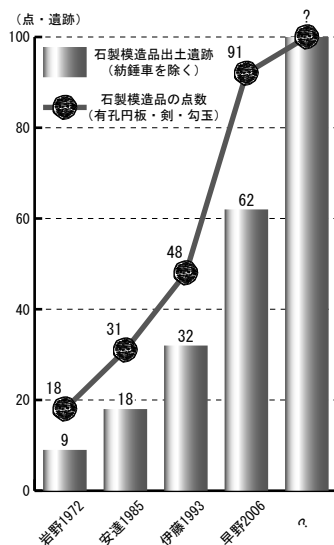
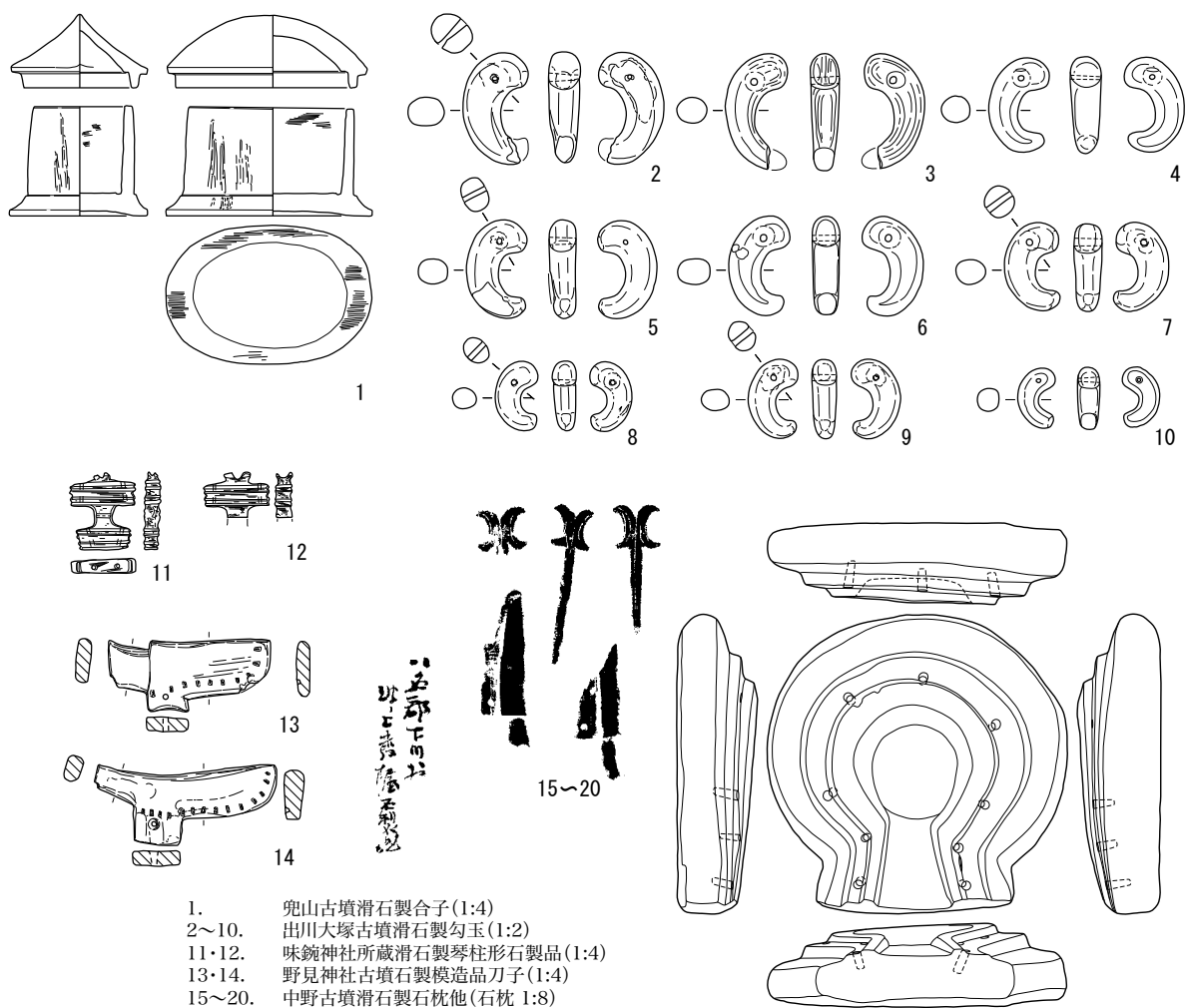


図 1 石製模造品出土遺跡・出土点数の推移



1. 兜山古墳滑石製合子(1:4)
 2~10. 出川大塚古墳滑石製勾玉(1:2)
 11・12. 味鏡神社所蔵滑石製琴柱形石製品(1:4)
 13・14. 野見神社古墳滑石製模造品刀子(1:4)
 15~20. 中野古墳滑石製石枕他(石枕 1:8)

図2 古墳出土の滑石製品・石製模造品

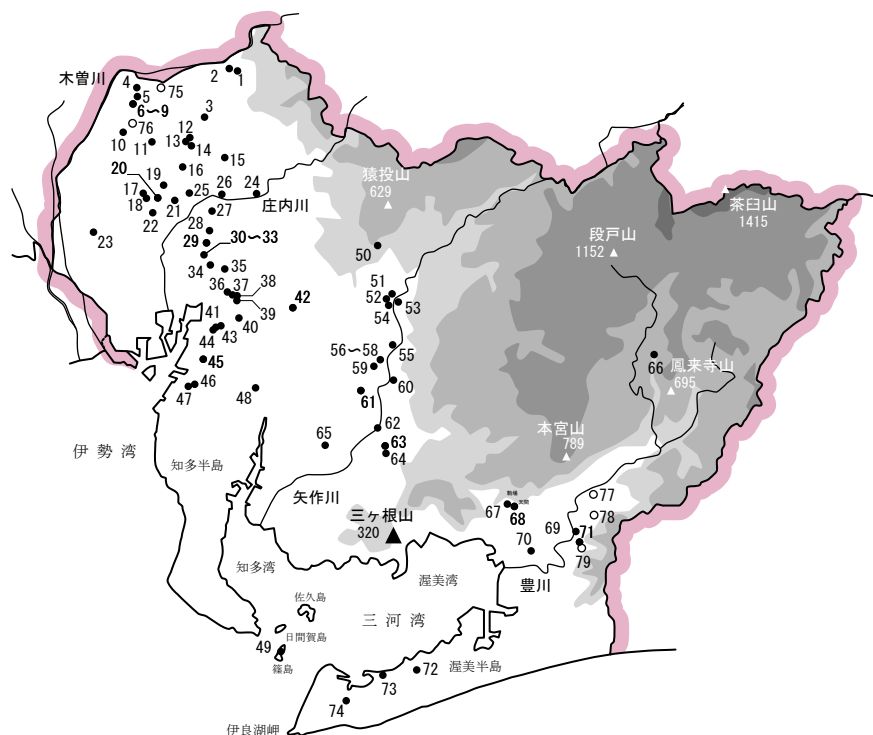


図3 石製模造品出土遺跡の分布(番号は表1に一致)

表1 石製模造品出土遺跡地名表

—県内遺構・遺物集成—石製模造品／早野

遺跡名	所在地	有孔 円板	剣	勾玉	管玉	臼玉	子持 勾玉	紡錘 車	その他	備考
1 北大森遺跡	犬山市橋爪字北大森	1	0	0	0	0	0	0		
2 上野遺跡	犬山市上野字八幡東	0	0	1	0	0	0	0		
3 大口町秋田字北替地採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
4 田所遺跡	一宮市田所他	1	0	0	0	0	0	0		
5 大毛池田遺跡	一宮市大毛字池田	0	0	0	1	0	0	0	丸玉1	
6 門間遺跡	一宮市門間	1	0	1	0	0	0	0		
7 一宮市門間字沼採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
8 一宮市門間字下流採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
9 門間沼遺跡	一宮市門間	0	0	0	0	1	0	3		
10 八王子遺跡	一宮市大和町荻安賀字北出	1	0	1	0	0	0	0	破片1?	
11 馬見塚遺跡	一宮市馬見塚字東見六	4	1	2	5	91	0	0		
12 御山寺遺跡	岩倉市中野町	1	0	0	0	0	0	0		
13 天神遺跡	岩倉市宮前町	0	0	6	0	0	0	0		
14 岩倉城遺跡	岩倉市下本町城跡	0	0	0	0	0	0	2		
15 中島遺跡	小牧市市之久田字中島	0	0	0	0	0	1	0		旧市之久田遺跡
16 弥勒寺御申塚遺跡	西春日井郡西春日町弥勒寺東	0	0	1	0	0	0	0		
17 中花の木遺跡	稲沢市奥田南花の木町	2	0	0	0	1	0	0		
18 地藏前遺跡	稲沢市七ツ寺町地藏前	1	0	0	0	0	0	0		
19 地藏越遺跡	稲沢市北市場町地藏越	1	0	0	0	0	0	0		
20 土田遺跡	稲沢市増田南町他・清須市	1	0	0	0	0	0	1		石材不明有孔円板?1
21 朝日遺跡	清須市朝日他	0	0	1	0	0	0	0		
22 大淵遺跡	海部郡基日寺町字大淵	0	0	0	0	0	0	3		
23 埴田遺跡	津島市埴田町	0	0	1	0	0	0	0		
24 松河戸遺跡	春日井市松河戸遺跡	0	0	1	0	0	0	0		
25 貴生町遺跡	名古屋市中区貴生町	1	0	0	0	1	0	0		有孔円板?1(線刻)
26 味噌B遺跡	名古屋市中区楠味鋺	0	0	0	0	0	0	1		
27 志賀公園遺跡	名古屋市中区平手町他	5	2	2	0	389	0	0		
28 名古屋城三の丸遺跡	名古屋市中区三の丸	0	0	0	0	1	0	0		
29 竪三蔵通遺跡	名古屋市中区栄	1	0	1	0	3	0	1		
30 金山北遺跡	名古屋市中区金山	0	0	0	0	3	0	1		
31 尾張元興寺遺跡	名古屋市中区正木	0	0	1	0	0	0	2		
32 正木町遺跡	名古屋市中区正木他	1	2	2	0	7	0	0	盾1?	
33 伊勢山中学校遺跡	名古屋市中区正木	0	1	1	0	16	0	1		
34 高蔵遺跡	名古屋市中区高蔵町他	0	0	0	0	2	0	0		
35 大喜遺跡	名古屋市中区大喜新町	0	0	0	0	0	0	1		
36 曾池遺跡	名古屋市中区曾池町他	3	0	0	0	0	0	0		
37 桜本町遺跡	名古屋市中区桜本町他	1	0	1	0	0	0	0		
38 楠町遺跡	名古屋市中区楠町他	1	0	0	0	0	0	0		1992年南山大学調査
39 春日野町遺跡	名古屋市中区春日野町他	0	0	0	0	2	0	0		
40 城遺跡	名古屋市中区鳴海町城他	2	1	0	0	119	0	0		
41 西古根遺跡	名古屋市中区高町西古根他	1	0	0	0	0	0	0	破片1?	泥板岩製有孔円板?1
42 若王子遺跡	豊明市省掛町若王子	0	0	1	0	0	0	2		
43 ミツ屋1号墳周辺	東海市名和町ミツ屋	0	0	0	0	0	1	0		
44 カブト山遺跡	東海市名和町石田他	0	1	0	0	0	0	0		石材不明剣形?1(無孔)
45 松崎遺跡	東海市大田町松崎	1	0	1	0	0	0	1		
46 法海寺遺跡	知多市八幡字平井	0	0	0	1	24	0	0		
47 細見遺跡	知多市八幡字細見	1	0	0	0	0	0	0		
48 天白遺跡	知多市東浦町大字緒川字天白	0	0	2	0	0	0	0		
49 神明社貝塚	知多市南知多町大字篠島字神戸	0	0	1	0	3	0	0		
50 上ノ段遺跡	豊田市長加納町上ノ段	0	0	0	0	0	1	0		
51 万加田遺跡	豊田市長井町万加田	0	0	1	0	0	0	0		
52 梅坪遺跡	豊田市長梅坪町	1	0	0	1	1	0	0	不明1	
53 高橋遺跡	豊田市長上ノ上野町	0	0	0	0	0	0	0	不明1	石材不明不明品1
54 千石遺跡	豊田市長中町	0	0	0	0	0	0	1		
55 水入遺跡	豊田市長刈町	3	3	1	6	115	0	0		
56 神明遺跡	豊田市長鶴町神明	5	1	1	4	231	1	0		
57 三味線塚古墳	豊田市長鶴町神明	1	0	1	0	3	0	0		
58 矢迫遺跡	豊田市長鶴町矢迫	0	0	0	2	13	0	0		
59 本川遺跡	豊田市長覚町本川他	0	0	1	0	2	0	0		
60 生平遺跡	岡崎市岩津町字生平	0	0	0	0	1	0	0		
61 小針遺跡	岡崎市小針町	0	0	1	0	0	0	3		
62 矢作川河床遺跡	岡崎市	0	0	0	0	0	1	0		
63 高木遺跡	岡崎市柱町字高木他	0	0	0	0	1	0	1		
64 神明遺跡	岡崎市柱町神明	0	0	0	0	0	0	1		
65 宮下遺跡	安城市桜井町宮下	1	0	0	0	0	0	0		
66 西沢遺跡	南設楽郡鳳来町海老字西洞	0	0	1	1	0	0	0		
67 駒場遺跡	豊川市平尾町大脇	0	0	0	0	0	0	1		
68 天間遺跡	豊川市平尾町天間	0	0	0	0	1	0	1		
69 郷中遺跡	豊川市三谷原町郷中他	0	1	0	0	0	0	0		片麻岩製剣形1
70 欠山遺跡	宝飯郡小坂井町大字小坂井字欠山	0	0	0	0	0	0	1		
71 白石遺跡	豊橋市石巻本町権割	0	0	1	0	2	1	1		
72 山崎遺跡	田原市大字野田字東山崎	0	0	0	0	0	0	3		
73 青山遺跡	田原市渥美町大字伊川津字横浜	0	0	0	0	0	0	1		
74 保美遺跡	田原市渥美町大字保美字平城	0	0	0	0	0	1	0		
75 浅井6号墳	一宮市浅井町尾関字同者	0	0	0	0	0	0	1		
76 野見神社古墳	一宮市今伊勢町宮後字稀荷	0	0	0	0	0	0	0	刀子2	
77 (伝)段林	新城市八名井字反林	0	0	0	0	0	0	1		
78 姫塚	豊橋市石巻西川町北の谷細田	0	0	0	0	0	0	1		
79 中野古墳	豊橋市石巻本町中野	0	0	0	0	0	0	0	石枕1・立花3・刀子2	
計		43	13	36	21	1033	7	39		

2 出土状況

石製模造品各種の出土が知られ、出土状況からそれらの帰属時期が推定できる主要な事例を以下に参照する。

馬見塚遺跡

馬見塚遺跡は、標高約7mの沖積平野に立地する遺跡で、A～Gの7地点において各時代の遺物が検出されている。石製模造品など古墳時代の遺物が豊富に出土したのはB地点で、有孔円板4点、剣1点、勾玉2点、管玉5点、白玉97点（現存91点）、鉄製品（現存刀子・鉄鏃各1点）が土器中とその付近から出土したという。他に土鈴1点、鏡形土製品1点が本遺跡の出土品とされているが、各報告にこれらの記述は残されていない。

正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡

互いに隣接する正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡の両遺跡は、標高約10mの熱田台地西縁端に立地する。尾張元興寺遺跡など周辺の遺跡を含めたこれら一連の遺跡（遺跡群）は、5世紀における名古屋台地の中核的な集落遺跡である。両遺跡では各次の調査を通じて石製模造品が豊富に出土している。正木町貝塚出土遺物として名古屋市博物館に所蔵されている剣（図5—21）、白玉各1点は出土状況が不明であるが、同地点において、いわゆる羽釜形態を呈する杯（図4—1）が出土している。伊勢山中学校遺跡では、松河戸Ⅱ式1段階の土器が鉄鋌、鉄鏃と一括して出土した第5次調査SB16において勾玉1点（図5—26）が出土している。

志賀公園遺跡

志賀公園遺跡は、庄内川左岸の標高約5mの沖積平野に立地する遺跡で、遺跡の各地点に目的的に集積された土器群（SU13、SU14、SU12、SU11）に混在して石製模造品が出土している。なお、これらの土器群は濃尾平野の古墳時代中期における土器編年の標識資料である。石製模造品は、松河戸Ⅱ式2段階の遺物集積SU13において有孔円板3点（図5—4～6）、勾玉1点（同28）、白玉134点、宇田Ⅰ式1段階の遺物集積SU14において有孔円板1点（同8）、剣2点（同22・23）、白玉155

点、宇田Ⅰ式2段階の遺物集積SU12において、有孔円板1点（同11）、勾玉1点（同32）、白玉50点、同じく宇田Ⅰ式2段階の遺物集積SU11において白玉28点が出土している。白玉の出土は松河戸Ⅱ式2段階から宇田Ⅰ式1段階にかけて多く、以後、数量を減じる傾向にある。なお、松河戸Ⅱ式1段階の遺物集積SU01においては、小型土器が出土するものの、石製模造品は認められない。

水入遺跡

水入遺跡は、矢作川右岸に埋没した標高約23mの低位段丘面に立地する遺跡で、矢作川に面する段丘崖を開削した大溝から、大量の土器群や刀形木製品などの木製品に混在して石製模造品が出土している。石製模造品は、大溝99B区SD01-6層・99A区SD01-6層において剣各1点（図5—16・18）、白玉計52点、98C区段丘崖SX01において勾玉1点（同29）、剣1点（同24）、白玉8点、99C区大溝SX13において有孔円板2点（同12・13）、白玉55点が出土した。SD01-6層出土土器群は、松河戸Ⅱ式併行の土器が主体で、須恵器は含まれない。一方、99C区SX13出土土器群は、宇田Ⅰ式2段階を前後する土師器と須恵器把手付碗などによって構成される。なお、99C区SX01には各時期の土器が包含され、出土状況から、石製模造品の帰属時期を推定することはできない。

神明遺跡

神明遺跡は、矢作川右岸の標高約30mの舌状台地上に立地する遺跡で、5世紀後半に集落造営の盛期がある。石製模造品として有孔円板5点、剣1点、勾玉1点、管玉4点、白玉231点、子持勾玉1点が出土しているが、これらの多くは、竪穴住居が埋没する過程で覆土に包含されたものである。やや不安定な出土状況下にあるながらも、神明Ⅱ期（松河戸Ⅱ式1段階に併行）の竪穴住居SB240において出土した有孔円板1点、管玉1点、白玉3点は、ごく初期の段階における石製模造品の消費を示す事例である。また、神明Ⅲ期（宇田Ⅰ式2段階に併行）のSX201において有孔円板1点（図5—3）、白玉65点が出土しているが、鉄鏃などの鉄製品を含めて一括出土したとされるSX201の土器

群は、土師器の型式から神明Ⅱ、Ⅲ期の複数時期に及ぶ可能性をも考慮しておきたい。その他、SB226から出土した勾玉1点と白玉2点は、「古式須恵器」を含む古墳時代中期の土器と知多式製塩土器1A類(図7—1)が共伴する可能性がある」と報告されている。

その他

上記の遺跡に加えて、石製模造品の帰属時期が推定できる事例について一瞥する。名古屋市中心遺跡では、大溝SD1の上層において、大量の土器群とともに有孔円板2点(図5—1・2)、剣1点(図5—19)、白玉119点、不明破片1点が出土した。出土した土器は松河戸Ⅱ式に相当する。

一宮市八王子遺跡Ab区(SD73下層)では、有孔円板1点(図5—9)、勾玉1点(同31)

が出土している。周辺(95Ba区など)では小谷が完全に埋積する過程で包含された宇田Ⅰ式の土器群(図4—5～15)が豊富に認められるので、有孔円板と勾玉も同時期に対応することが予測できる。一宮市田所遺跡92Aa区では、古墳時代中期の水田面を精査する過程で、絹雲母片岩製の有孔円板1点(図5—15)が出土した。同一の層位で出土した土器には、宇田型甕3類(図4—3、宇田Ⅰ式)と須恵器有蓋高杯(同4、城山2号窯期)がある。東海市松崎遺跡の有孔円板1点(図5—14)は包含層中の出土で、共伴する土器は明確ではないが、原則として遺跡の形成は、宇田Ⅰ式であることから、有孔円板が帰属する時期の上限も同時期に求めることができる。

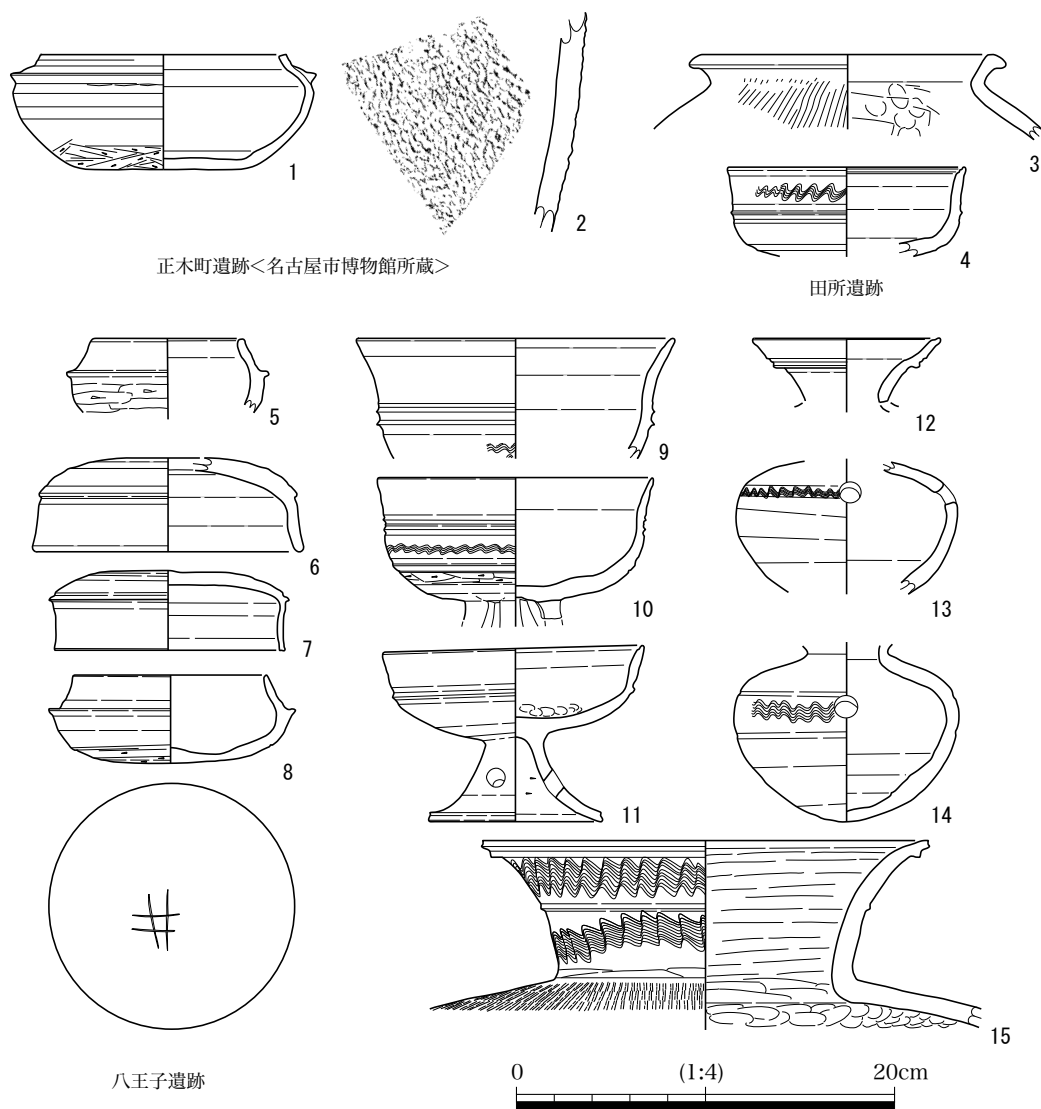


図4 各遺跡から出土した古墳時代中期の土器

3 消長

共伴した土器から年代の推定が可能な石製模造品を手がかりとして、以下、有孔円板、剣、勾玉の型式変化と、各種から構成される組成の推移について、その大略を把握する。結果、土器編年に則して、定着期、盛行期、衰退期の3期に大別、1～6期の6期に細別した区分を提示する(図5)。

定着期〈1・2期〉— 松河戸Ⅱ式

集落において石製模造品の消費が定着する段階を定着期とした。松河戸Ⅱ式が対応する。さらに、松河戸Ⅱ式の区分に従い、松河戸Ⅱ式1段階に対応する段階を1期、松河戸Ⅱ式2段階に対応する段階を2期とした。1期は明確ではないが、神明遺跡SB240の事例から、有孔円板が剣に先行して使用されている可能性がある。また、伊勢山中学校遺跡第5次調査SB16において出土した勾玉(図5—26)は小型でありながら、丸みをほとんど失った形態である。豊田市本川遺跡は、松河戸式に併行する段階(本川式)に集落造営の盛期を迎え、続く宇田式に併行する段階(神明式)には終息に向かう遺跡で、小型で丸みがある勾玉1点(同25)と白玉2点が出土している。また、本川遺跡SD2001をはじめ、松河戸Ⅱ式1段階に相当する稲沢市福田遺跡SD01、志賀公園遺跡SU01では、小型土器が多出する一方で、石製模造品は出土しないことから、1期以前は小型土器を使用する集落祭祀が主で、同時に丸みを残した勾玉は原則として1期以前の所産であることが予測できる。

2期には、志賀公園遺跡SU13、水入遺跡99B区SD01-6層・99A区SD01-6層、城遺跡SD1上層の事例から、有孔円板、剣、勾玉、白玉の使用が広く定着していることが理解される。有孔円板は、志賀公園遺跡SU13(図5—4～6)のように径2.0cm前後の小型のもので構成される。剣は水入遺跡(同16・18)のように鎬状の表現を残す断面三角形、菱形のものがある一方で、城遺跡(同19)のように扁平化したものも認められる。城遺跡の剣は扁

平に形式化しつつも、基部側を三角形状に加工することで茎状の表現を保ち、懸垂用の小孔も茎に近い位置(基部側)にある。より詳細に観察すると、頂辺と側辺の間にはわずかな斜面を残し、茎に相当する部分は基部側に傾斜する。つまり、表裏の区別が完全には失われていない形状として認識できる。勾玉は志賀公園遺跡SU13(同28)のように一気に大型、扁平化が進行するが、緩やかな「C」字状の形状を残す。なお、出土状況が不安定ながら、津島市埋田遺跡の勾玉(同27)は、整形時の面を多く残し、やや小型で厚みがあるもので、その形状から先行する1期に帰属させることができるであろう。この推定は、埋田遺跡においてS字甕D類(新)など松河戸Ⅱ式1段階の土器が出土していることによっても補強される。

以上から、石製模造品の当地域への定着は、ごく短期間に実現し、続く盛行期に速やかに移行したことが理解される。剣や勾玉などの扁平化(形式化)に向かう速度も相当に速かったのであろう。

盛行期〈3・4期〉— 宇田Ⅰ式

集落において石製模造品の使用が普遍化する段階を盛行期とした。宇田Ⅰ式が対応する。宇田Ⅰ式の区分に従い、宇田Ⅰ式1段階に対応する段階を3期、宇田Ⅰ式2段階に対応する段階を4期としたが、編年上の区分、それに対応する石製模造品の出土状況にはやや不安定な面がある。

3期は、志賀公園遺跡SU14の事例を中心とした把握である。有孔円板(図5—8)は小型ながらもやや粗雑化し、双孔の位置が極端に離れ、楕円形に近い形態のものがみられるようになる。八王子遺跡の有孔円板(同9)は、小型で円形ながら、双孔の位置が離れた特徴から3期に位置づけた。出土状況もおよそ調和的である。岩倉市御山寺遺跡の有孔円板(同10)は、作りが薄いものの、側面の研磨面数が多い特徴から、3期でも4期に近い所産として理解した。剣は原則として扁平化したものに移行し、基部側にあった茎状の表現は完全に消失する。懸垂用の小孔は基部から離れた位置に移動し、志賀公園遺跡の剣(同22・23)は剣身に相当する

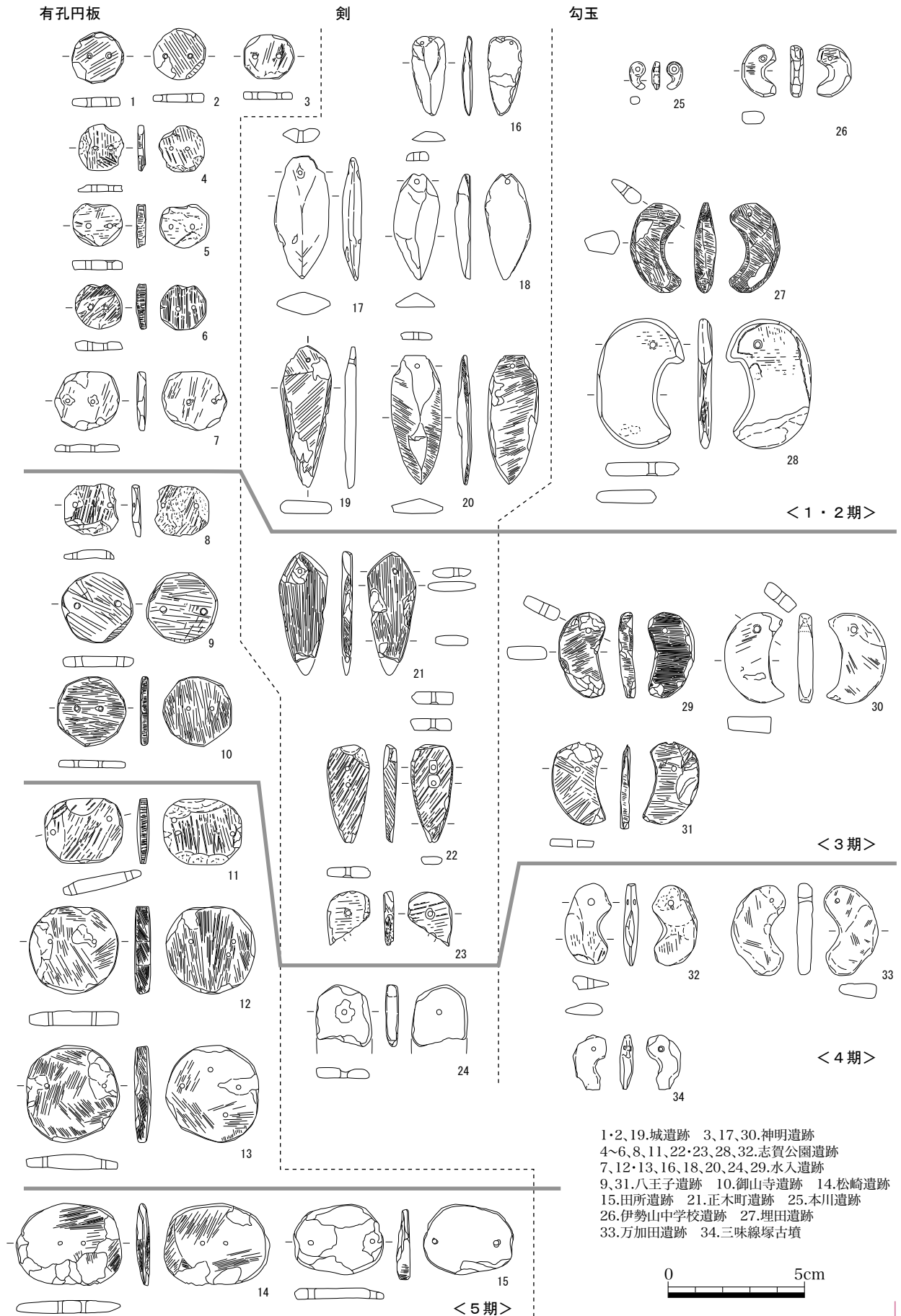


図5 石製模造品（有孔円板・剣・勾玉）の消長

部分に縦列に2孔を穿孔する。正木町遺跡の剣（同21）は明確ではないが、同地点から出土した土器を考慮して3期とした。勾玉は明確な出土例がないが、八王子遺跡における出土状況、次段階の勾玉との比較を参考として、八王子遺跡（同31）、水入遺跡（同29）、神明遺跡（同30）などの諸例が同期に対応すると仮に推定した。それらによると、剣と同様、扁平化したものが画一的な形態として存在することが予測できる。あるいは、有孔円板、剣、勾玉の大きさが相互に近似することも形態の画一化と無関係ではないように思われる。その他、勾玉特有の「C」字形の形状が失われ、わずかに彎曲する形態に変化する点が指摘できる。

4期は、志賀公園遺跡SU12、水入遺跡99C区SX13の事例を参考とする。有孔円板（図5—11～13）は径3.0cm前後に大型化し、厚みも増す。双孔の位置は、相互に離れるばかりでなく、穿孔位置に乱れがみられることも珍しくない。勾玉（同32）は粗雑化し、勾玉特有の形態も、元来の形状を想像させないまでに完全に失われつつある。豊田市万加田遺跡の勾玉（同33）も同期の所産であろう。剣の出土は明確でないが、水入遺跡の粗雑化した剣（同24）が同期に対応する可能性がある。あるいは、剣の使用そのものが低調になっていたことも考えられる。三味線塚古墳の周溝において、東山111号窯期の須恵器に伴出した有孔円板、勾玉（同34）は4期を上限とする。

以上のように、盛行期としたこの段階は、3期に石製模造品の使用が一気に定着、普遍化した2期の流れを受けながら、4期には衰退期とする次段階に向かう流れも顕在化しつつある段階として把握できるであろう。

衰退期＜5・6期＞—宇田Ⅱ式以降

石製模造品の使用が低調となり、やがて消滅する段階を衰退期とした。宇田Ⅱ式以降が対応する。宇田Ⅱ式に相当する段階を5期、およそ儀長式が相当する6世紀を中心とした時期を6期とした。

5期には、田所遺跡（図5—15）、松崎遺跡（同14）の事例がある。有孔円板の出土が知られるのみで、剣、勾玉といった品目の存在は明

確でない。両者ともすでに前段階において退化の傾向が著しかったことからすると、この段階には組成から欠落したか、例外的に存在するのみであったと思われる。有孔円板は、楕円形の形態が一般化し、前段階には全面に行き届いていた研磨がこの段階には極端に省略され、面の整形が不十分になる。また、田所遺跡の有孔円板は滑石製ではなく、絹雲母片岩製で、この段階の石製模造品の製作に際しては、類似の石材による代替も珍しくなかったようである。

さらに神明遺跡や後述する伊勢山中学校遺跡第7次調査の事例などから、有孔円板、剣、勾玉といった品目が原則的には消失し、白玉の使用のみが継続する段階を6期とした。6期には石製模造品としての有孔円板、剣、勾玉が消失する一方で、土製模造品が使用されたとみられるが、県内においては良好な事例に恵まれず、田原市青山遺跡（貝塚）における鏡、春日井市勝川遺跡における勾玉、西尾市若宮西遺跡における勾玉、名古屋市名古屋城三の丸遺跡御屋形地点における丸玉などが知られる程度である。

子持勾玉

子持勾玉については、小牧市中島遺跡（旧市之久田出土）、東海市三ツ屋1号墳周辺（図6—1）、豊田市上ノ段遺跡（同2）、同神明遺跡（同5）、岡崎市矢作川河床遺跡、豊橋市白石遺跡（同4）、田原市保美遺跡（同3）に出土例がある。幸い、それぞれの発見例には詳細な報告が付されている。ここでは、資料を実見する機会に恵まれた二例について、改めて概要を記し、幾つかの知見を加えておく。

三ツ屋1号墳の周辺で1954年に採集された子持勾玉（図6—1）は、個人によって永らく保管され、2004年に東海市立郷土資料館に寄贈された。子持勾玉は全体に丸みを保持した形態で、子玉を含めた計測値は、長さ6.0cm・幅4.5cm・厚さ2.7cm、現状での重さは63.4gである。石材として深緑色の滑石を使用する。親玉は断面円形で、両端を平坦に整形する。仮に親玉の計測値を示すと長さ5.6cm・幅2.8cm・厚さ2.2cmとなる。穿孔は両面より施される。子玉は脊側に3、両側面に2、腹側に1を削り出し、各子玉は整った勾玉の形

状を保持する。それぞれの位置に配される小玉の大きさや形状は均質的である。

表面は、削痕をほとんど残さない入念な研磨によって仕上げられる部分が多いが、腹側を中心として幅1～2mmを単位とするケズリ痕跡が残されている。中井正幸による製作手法の観察視点（中井1993）を参考とすると、前者が「手法f」、つまり「表面に条痕はほとんど残らず、光沢を発するような研磨手法」、後者が「手法c」、つまり、「断続的な短い単位にケズリ痕を残す手法」に相当しよう。これら形態上の特徴から、三ツ屋1号墳周辺から出土した子持勾玉は、県内から出土した他の諸例に対して時期が先行すると考えられる。なお、脊側を中心として赤色顔料の付着が認められるようでもあるが、採集品としての性格上、積極的な評価は難しかろう。蛍光X線分析の結果も、ペンガラの可能性を示すにすぎなかった。

保美遺跡（貝塚）において採集された円圏

文子持勾玉（図6—3）は現在、豊橋市美術博物館が所蔵する（旧重要美術品指定）。子持勾玉は三ツ屋1号墳周辺の例と比較して、明らかに丸みを失いつつある。子玉を含めた計測値は、長さ8.0cm・幅4.8cm・厚さ3.2cmである。石材として深い青みがかった黒色の滑石を使用する。親玉の両端の面の整形はごく曖昧である。仮に親玉の計測値を示すと長さ8.0cm・幅3.0cm・厚さ2.5cmとなる。穿孔は円圏文配置後に両面から穿孔する。子玉は脊側に3、両側面に2、腹側に1を削り出すが、両側面の子玉は突起状に退化し、脊側の子玉の削り出しもやや曖昧である。腹側の子玉は大きく誇張するかのようには削り出している。脊側と腹側の子玉の周囲には整形時の削痕が顕著に残るが、他の部分については、入念な研磨によって仕上げられている。さらに研磨後には、両側面に円圏文を充填するように配置する。円圏文の径は約0.5cmである。

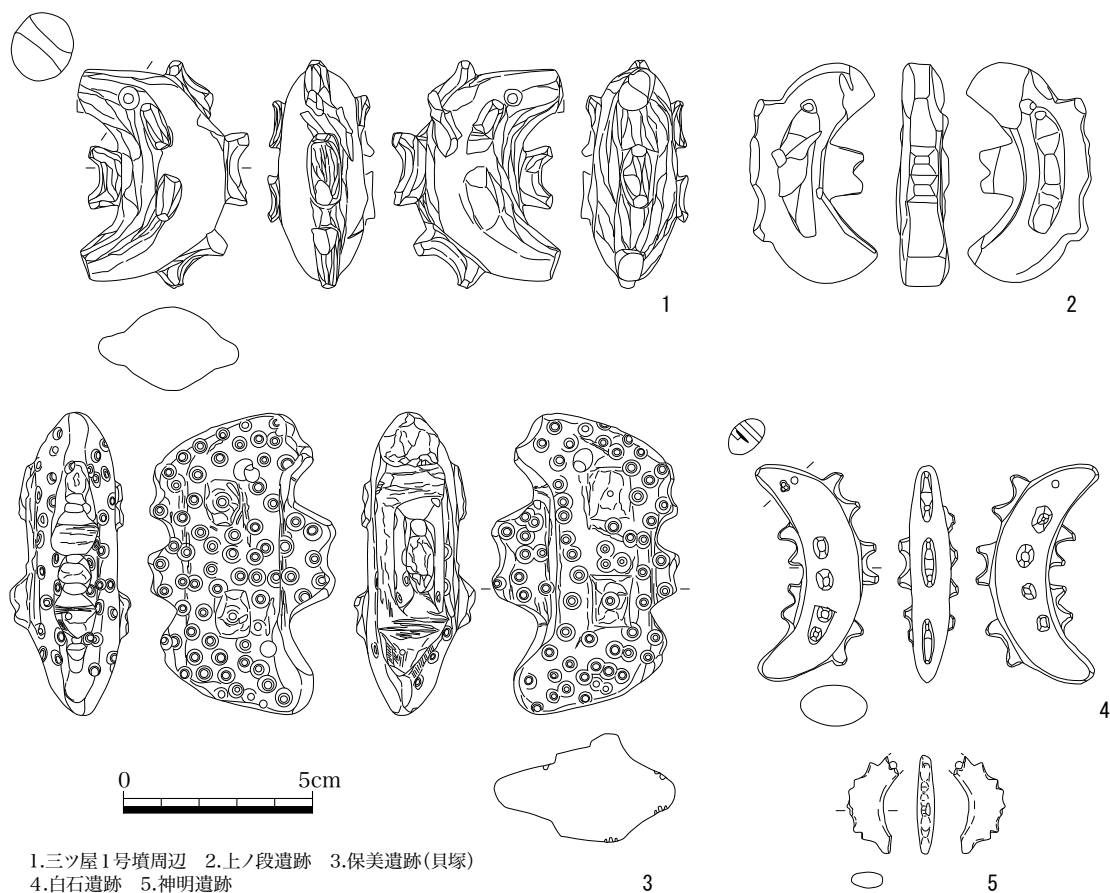


図6 子持勾玉の諸例



上；三ツ屋 1 号墳周辺採集子持勾玉、右は腹側に残るケズリ痕跡（東海市立郷土資料館所蔵）

中；保美遺跡（貝塚）採集子持勾玉、右は側面を充填する円圏文（豊橋市美術博物館所蔵）

下；白石遺跡採集子持勾玉、右は孔内に残る折損した鉄製錐（豊橋市美術博物館所蔵）

子持勾玉の諸例については、単独で出土した例や採集品が多く、時期の推定は困難であるものの、やや特異な形態の神明遺跡例を除くと、有孔円板など他の石製模造品の品目と共存することがないことから、主として子持勾玉が使用された時期は5期以降と考えられる。これ以上深く立ち入った考察は困難であるが、石川県高田遺跡の祭祀遺構において出土した円圏文子持勾玉にはTK47型式併行の須恵器が共伴したとする所見（四柳1983）が参考となる。高田遺跡の円圏文子持勾玉は、脊側に5、腹側に1、両側面に5の整った子玉を削り出したもので、勾玉特有の彎曲、丸みがある形態からも、型式学的には保美遺跡例に先行する。よって、保美遺跡の子持勾玉は6世紀（6期）に帰属すると考えられる。

小結

以上の検討を通じて、（白玉を除いた）石製模造品が集落において定着、盛行、衰退の過程を経るのは、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式の比較的限制された期間であることが明確となった。この間、3期とした段階に、有孔円板、剣、勾玉の主要品目が、相互に画一化を志向する段階があったと想定される一方で、各品目の消長は決して同一ではないことも同時に判明した。

このとき、従来年代の検討を難しくしていた馬見塚遺跡B地点の祭祀遺物に対しても一つの解釈を与えることが可能になると思われる。つまり、馬見塚遺跡B地点においては、小型土器を使用する段階—1期以前、石製模造品（有孔円板・剣）を使用する段階—1・2期、土製模造品（鏡）を使用する段階—6期を通じて祭祀が継続していたことが理解されるであろう。この理解に対しては、祭祀遺物に共伴した土器型式からも矛盾なく説明することが可能である。

4 古墳出土の石製模造品との対照

古墳出土の石製模造品に対しても、本稿における時期区分との対照を試みておきたい（表2）。古墳出土の石製模造品は、各氏によって時期区分が果たされているが（小野山1977、白石1985、寺沢1990、北山2002、河野

2002・2003、田中2002など）、ここでは各品目の組成変化を中心に整理した白石太一郎の時期区分を代表させることとする。古墳に副葬される代表格としての刀子の形態変化を軸とした北山峰生や河野一隆による時期区分との詳細な対比にはやや難がある。今後の検討課題としたい。

最初に、集落において石製模造品が定着する2期は、「鏡の模造品を粗雑にした有孔円板や粗造の剣が出現する」白石第3期に重複することが容易に推察できる。つまり白石第3期の古墳は松河戸Ⅱ式2段階（大庭寺遺跡併行）の前後に位置づけることが可能であろう。なお、白石が第3期の古墳として例示した群馬県白石稲荷山古墳は、扁平な勾玉を含みつつ、丸みを帯びた勾玉が多いことから第3期でも初期の段階として位置づけられているので、第3期の開始は、本稿における1期に重複することが予測できる。

また、白石第2期は、有孔円板や粗造の剣が出現する以前で、勾玉が扁平化していない段階とされるので、本稿における1期以前の段階、つまり松河戸Ⅱ式1段階以前が相当すると考えられる。東京都野毛大塚古墳第1主体から出土した整形時の面を多く残し、丸みが失われつつある滑石製勾玉は、すでに1期として位置づけた埋田遺跡の勾玉に類似、あるいは型式的に若干先行するので、1期あるいはその直前に対応するであろう。同じく白石第2期に相当すると考えられる岐阜県遊塚古墳（前方部副葬品埋納施設）は同様に1期以前、つまり松河戸Ⅱ式1段階以前に位置づけられ、古墳の年代観とも概ね整合する。参考までに、集落において石製模造品が出現する以前の段階で、写実的な造りの農工具の副葬を中心とする白石第1期は、松河戸Ⅰ式前半に重複することが見込まれ、さらに滑石製農工具を含まず、滑石製容器や滑石製玉類のみの滑石製品を副葬する古墳がそれに先行すると理解するなら（都出1979、森下2005）、兜山古墳の滑石製合子（図2—1）、出川大塚古墳の滑石製勾玉（同2～10）は、松河戸Ⅰ式初頭前後の所産と理解して大過ないと思われる。

白石第4期は、明らかに形骸化した粗雑な

表 2 滑石製品・石製模造品出土古墳との対照

土器編年		滑石製品・石製模造品 出土古墳				
400	松河戸Ⅰ式 前後		白石第1期 0	小野山第1期 第1期	寺沢第1期 第1期	田中(常総)Ⅰ期 第1期
	松河戸Ⅱ式 1	(陶邑窯)	1	第2期	第2期	Ⅱ期
	2	(猿投窯) T G 232	2	第3期	第3期	Ⅲ期
	宇田Ⅰ式 1	T K 73	3	第4期	第4期	Ⅳ期
450	2	東山111号窯 T K 216 (東山48号窯) O N 46	4	第5期	第5期	Ⅴ期
	宇田Ⅱ式 1	城山2号窯 T K 208	5	第6期	第6期	Ⅵ期
500	2	東山11号窯 T K 23 T K 47 (下原) M T 15				
	儀長式 東山61号窯 T K 10 M T 85					

石製模造品が副葬される段階とされるが、石製模造品の副葬はごく限られた地域に単発的に顕在化する現象で、中期における石製模造品とは「一線を画すべきもの」(北山 2002)、「一連の系譜上のものとしては対象外とみなして良い」(田中 2002) ものである。つまり、白石第3期と白石第4期に大きな断絶があることは明白で、本稿における5期が相当する5世紀後葉段階の石製模造品の存在形態については、より詳細に再整理される必要がある。

5 石製模造品の流通と保有形態

以上までの整理を受けて、石製模造品の流通と保有形態に関係する幾つかの問題について、簡単に見通しを述べつつ本稿の結びとしたい。

石製模造品の集落における定着は、1～2期のごく短期間の実現され、続く3期には画一化に向かう流れも看取された。この流れは、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式にかけて、つまり5世紀中葉に滑石製品の(当地域における)地域生産が確立したことを示唆する。また、石製模造品の使用が、(知多半島基部の兜山古墳を除いて)前期古墳の分布が空白であった知多半島や三河湾の島嶼にまで普及した事実から、石製模

造品を使用する祭祀は、古墳の築造が伝播する流れを必ずしも基調としなかったことが理解される。ここに指摘した石製模造品の地域生産の確立過程と石製模造品の使用が集落に普及する流れは、古墳に副葬された石製模造品として数少ない事例である1期以前の野見神社古墳の刀子(図2—14)が、奈良県橿山古墳など各地の古墳に副葬された刀子の一群と背側が大きく反り、鞘と柄に段差がなく、切先が角張る独特な形態を共有することと比較すると対照的である。これら一群の刀子は、北山峰生が「橿山C類型」として抽出するもので(北山 2003)、中川敬太や田中新史も同様な視点からこれら一群に注目している(中川 2002、田中 2002)。

古墳の動態は別として、興味深いことに5世紀中葉に広域に流通した石製模造品には、東山窯産の初期須恵器(図4)が付随していることが多い。本稿において例示した馬見塚遺跡、正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡、志賀公園遺跡、水入遺跡、神明遺跡、八王子遺跡などはいずれもその例に違わない。また、伊勢山中学校遺跡第5次調査SB16における鉄鋌と鉄鏃の出土に加え、神明遺跡SX201では、初期の段階に属する長頸鏃、円錐状鉄器が出土している。円錐状鉄器は鈴木一有により(舌を伴わないもの

の鉄鐸である可能性が示され、鍛冶に関する祭祀が実施されたことが説かれている（鈴木 2005）。さらに神明遺跡に隣接する三味線塚古墳の周溝においても、同様の鉄製品が石製模造品に共伴して出土している。つまり、石製模造品は、鉄器製作の場においても、何らかの関係を有した形跡がある。

古墳時代中期後半から後期にかけて、滑石製品の需要は有孔円板、剣、勾玉といった石製模造品から、実用品としての紡錘車、あるいは祭祀具としての白玉や子持勾玉に移行すると考えられる。これらには製塩土器の動き、つまり塩の流通が付随する可能性がある。つまり、6世紀に至っても白玉を大量に消費した神明遺跡には知多式製塩土器ⅠA類（図7—1）の出土が知られるし、伊勢山中学校遺跡（第7次調査）では、塩と白玉を同時に使用した祭祀の存在が明らかにされている（註1）。同様に滑石製紡錘車3点出土した尾張元興寺遺跡、一宮市門間沼遺跡には、それぞれ知多式製塩土器ⅠA類（同2）、ⅠC類（同3）の出土が知られる。その一方で、製塩遺跡である松崎遺跡や青山遺跡（貝塚）においても滑石製紡錘車が出土する。ごく短期間に半島や島嶼への石製模造品の普及が達成され、三ツ屋Ⅰ号墳周辺や保美遺跡（貝塚）に子持勾玉がもたらされた背景には、塩と滑石製品の予想以上に密接な結びつきが反映されているようにも思われるのである。

石製模造品の地域生産が確立するとした5世紀中葉は同時に、東山窯における須恵器生産が確立し、知多式製塩土器が成立に向かう段階

ともほぼ符合する（註2）。これらの動きを有機的に関連させるなら、産地が限定される石製模造品などの滑石製品は、同様に産地が窯業生産地や臨海に限定される須恵器や塩などの生産物と対価の交換財として流通した品目であったと想像できる。無論のこと、これらの品目を交換財として、広範に行き渡らせるには、流通網の組織的な整備が必要である。今後、より具体的に考究したい。

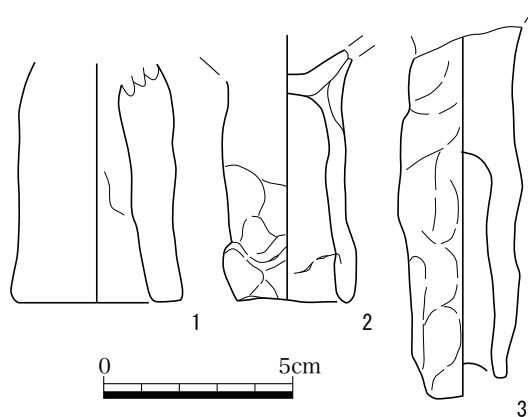
おわりに

以上、県下を対象とした集成結果を下敷きとして、石製模造品の主要品目についての変化の傾向を示し、それぞれに年代を与えた。今回提示したのは、石製模造品の地域展開に限定したささやかな作業にすぎないが、一定の基準を提示する目的は達せられたであろう。無論のこと、次段階の作業として、より広域を対照とした比較検討、古墳出土の石製模造品と他の副葬品目との編年的位置関係の整理が必要である。また、今回の作業は、石製模造品の現象面における記述に終始し、石製模造品を使用した儀礼の内容については全く触れることがなかった。しかし、石製模造品の儀礼の意味を知るには、石製模造品のみを分析の対象とするのではなく、それを広く古墳時代祭祀の系譜、体系に位置づけて理解する必要がある。前回に触れた個別家族の自立化に関わる問題（高橋 1971）についても、何ら考えを深めることがなく、議論の幅を著しく狭めてしまった感は否めない。今後、発展させるべき多くの内容を明示して、今回の作業を終えることとしたい。

本稿作成の過程で、以下の各氏、各機関からご高配を賜った。記して感謝する。

赤塚次郎 磯谷和明 入江文敏 岩原 剛
北山峰生 鈴木一有 瀬川貴文 立松 彰
土本典生 永井邦仁 中井正幸 中尾麻由美
賛 元洋 服部哲也 深谷 淳 古谷 毅
北條献示 水野裕之 森 泰通 堀木真美子
愛知県埋蔵文化財調査センター

名古屋市見晴台考古資料館
一宮市博物館 大垣市歴史民俗資料館
東京国立博物館 豊橋市美術博物館
名古屋市博物館 東海市立郷土資料館
津島市教育委員会



1.神明遺跡 2.尾張元興寺遺跡 3.門間沼遺跡

図7 集落から出土した知多式製塩土器Ⅰ類

註

1) 福井県浜瀬遺跡では、径約 3.2 m、深さ約 1 m の土坑から製塩土器、土師器、白玉、土製丸玉などが浜瀬Ⅱ A 式製塩土器に共伴して出土し、土坑周辺には石製模造品として有孔円板、勾玉、白玉が残されていた。入江文敏は、ミニチュア土器を使用しての所作儀礼が実施され、近辺の柵には石製模造品や土製丸玉が懸垂されていたことを想定している（入江 2003）。

2) 滑石製品生産と多岐に及ぶ生産体系の変動が同時代性を帯びていることは、関川尚功が畿内の玉生産からすでに論じている（関川 1985）。また関川は、畿内の滑石製玉類の生産における一大画期を 5 世紀中葉～後半（TK73 型式前後）に求めている。畿内、東海で滑石製品生産の画期がほぼ一致することも興味深い現象である。

参考文献

- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集）（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第 2 号 （財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター。
- 安達厚三 1985 「愛知県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集（附篇） 国立歴史民俗博物館。
- 伊藤正人 1993 「愛知県-古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物-」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』北武蔵古代文化研究会・東日本埋蔵文化財研究会。
- 入江文敏 2003 「製塩遺跡における祭祀の形態—浜瀬遺跡をケーススタディとして—」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』 関西大学
- 岩崎卓也 1986 「古墳時代祭祀の一側面」『史叢』第 36 号。
- 岩崎卓也 1987 「「三種の信宝」の周辺」『比較考古学試論』雄山閣。
- 岩野見司 1972 「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第 2 巻 雄山閣。
- 小野山節 1977 「千葉市石神 2 号墳の年代論の意義」『千葉市東寺山石神遺跡』日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局・（財）千葉県文化財センター。
- 河野一隆 2002 「石製模造品」『考古資料大観 第 9 巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館。
- 河野一隆 2003 「石製模造品の編年と儀礼の展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集 帝京大学山梨文化財研究所。
- 北山峰生 2002 「石製模造品副葬の動向とその意義」『古代学研究』第 158 号 古代学研究会。
- 北山峰生 2003 「石製模造品生産・流通の一形態」『橿原考古学研究所論集』第十四 八木書店。
- 佐久間正明 2004 「福島県における五世紀代古墳群の研究—石製模造品を通した正直古墳群の分析を中心に—」『古代』第 117 号 早稲田大学考古学会。
- 篠原祐一 2005 「滑石の生産と使用をつなぐ視点」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』埋蔵文化財研究会。
- 白石太一郎 1985 「神まつりと古墳の祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集 国立歴史民俗博物館。
- 鈴木一有 2005 「鉄器の受容からみた古墳時代中期の東海」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム。
- 関川尚功 1985 「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米壽記念獻呈論文集』乾 末永先生米寿記念会。
- 高橋一夫 1971 「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』第 18 巻第 3 号 考古学研究会。
- 田中新史 2002 「伝常陸浮島出土の滑石製模造品」『土筆』第 7 号 土筆舎。
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第 26 巻第 3 号 考古学研究会。
- 寺沢知子 1990 「石製模造品の出現」『古代』第 90 号 早稲田大学考古学会。
- 戸田有二編 1998 『古代祭祀 建鉾山遺跡』吉川弘文館。
- 中井正幸 1993 「古墳出土の石製祭器—滑石製農具を中心として—」『考古学雑誌』第 79 巻第 2 号 日本考古学会。
- 中川敬太 2002 「大和と周縁地域における農具形石製模造品の展開」『潮航』第 20 号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会。
- 早野浩二 2005 「祭祀遺物」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 埋蔵文化財研究会 2005 『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』。
- 森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第 89 巻第 1 号 日本考古学会。
- 四柳嘉章 1983 「古墳時代の沙庭と祭具—富来町高田遺跡祭祀遺構の一考察」『石川考古学研究会々誌』第 26 号（『北陸の考古学』）石川考古学研究会。

遺跡文献一覧（番号は表 1 に一致）

- 1 北大森遺跡；宮川芳照 1983「北大森遺跡出土の有孔円板と碗」『犬山市史 資料編三 考古 古代・中世』犬山市。
- 2 上野遺跡；正岡久直他 2005『木曽川学研究』第 2 号 木曽川学研究協議会。
- 4 田所遺跡；小澤一弘編 1997『田所遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 71 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 5 大毛池田遺跡；武部真木編 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 72 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 6 門間遺跡；岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第 2 巻 雄山閣／一宮市博物館 1990『一宮市博物館資料目録（1）』。
- 9 門間沼遺跡；石黒立人編 1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 80 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 10 八王子遺跡；樋上昇編 2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 11 馬見塚遺跡；岩野見司「馬見塚遺跡 B 地点—祭祀遺跡—」『新編 一宮市史 資料編四』一宮市。
- 12 御山寺遺跡；石黒立人・永井邦仁 2006「御山寺遺跡」『年報』平成 17 年度 （財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター。
- 13 天神遺跡；岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第 2 巻 雄山閣。
- 14 岩倉城遺跡；松原隆治編 1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 15 中島遺跡；小栗鐵次郎 1935「北里村大字市之久田「子持勾玉」発見地」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十六 愛知県／立松宏 1975「考古」『小牧市史 資料編 1（文化財編）』小牧市。
- 16 弥勒寺御申塚遺跡；近藤真人他 1998『弥勒寺御申塚遺跡』西春町弥勒寺御申塚遺跡発掘調査会。
- 17 中花の木遺跡；清水雷太郎 1972『稲沢市大里付近の遺物』稲沢市教育委員会／井口喜晴 1984『新修 稲沢市史 史料編六 考古』稲沢市。
- 18 地藏前遺跡；稲沢市教育委員会 1983『稲沢市考古資料図録—原米吉氏収集資料—』。
- 19 地藏越遺跡；日野幸治他 1996『北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市北市場土地区画整理組合・稲沢市内遺跡発掘調査団。
- 20 土田遺跡；北條献示・日野幸治編 1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』愛知県名古屋農地開発事務所・土田関連遺跡発掘調査団／赤塚次郎編 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 21 朝日遺跡；宮腰健司編 2000『朝日遺跡VI—新資料館地点の調査—』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 22 大洲遺跡；宮腰健司編 1991『大洲遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 23 埋田遺跡；吉田富夫 1968『埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会／早野浩二 2005「埋田遺跡」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 24 松河戸遺跡；赤塚次郎編 1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 25 貴生町遺跡；佐藤公保他 1990「貴生町遺跡」『月縄手遺跡・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 12 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター／樋上昇 1994「貴生町遺跡Ⅱ」『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ 月縄手遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 55 集 （財）愛知県埋蔵文化財センター
- 26 味鋤 B 遺跡；倉橋敦子・中嶋理恵 1995『味鋤 B 遺跡調査報告書』味鋤 B 遺跡調査会。
- 27 志賀公園遺跡；永井宏幸編 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター／石黒立人編 2004『志賀公園遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 28 名古屋城三の丸遺跡；鈴木正貴編 2005『名古屋城三の丸遺跡（Ⅶ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 29 竪三蔵通遺跡；名古屋市教育委員会 1984『竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』／伊藤厚史 1986『第Ⅲ次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／水野裕之 1991『竪三蔵通遺跡—第 10 次調査の概要—』名古屋市教育委員会／水野裕之 1993『竪三蔵通遺跡—第 12 次調査の概要—』名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。
- 30 金山北遺跡；伊藤敬太郎編 2004『金山北遺跡』名古屋市住宅都市局・（財）名古屋都市整備公社。
- 31 尾張元興寺遺跡；服部哲也編 1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告 28 名古屋市教育委員会／野澤則幸 2000『尾張元興寺跡第 8 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。
- 32 正木町遺跡；稲垣晋也 1957「愛知県名古屋正木町貝塚」『日本考古学年報』5／岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第 2 巻 雄山閣／三渡俊一郎 1986『千種・東・中区の考古遺跡』文化財叢書第 88 号 名古屋市教育委員会／名古屋市博物館 1987『館藏品図録Ⅱ』／野口泰子他 1989『正木町遺跡第 4 次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／竹内宇哲 1988『正木町遺跡第 2 次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／竹内宇哲 1989『正木町遺跡第 3 次調査概要報告書』名古屋市教育委員会／木村有作 1996『正木町遺跡第 6 次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／原久仁子他 1997

『正木町遺跡』南山大学大学院考古学研究報告第7冊 南山大学大学院考古学研究室／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会／早野浩二 2005「祭祀遺物」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県。

33 伊勢山中学校遺跡；木村光一・村木誠 1996『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』名古屋市文化財調査報告31 名古屋市教育委員会／服部哲也 1998「『塩』が入っていた！—小さなタイムカプセルその後—」『名古屋市見晴台考古資料館報 みはらし』№196 名古屋市見晴台考古資料館／服部哲也 1998『伊勢山中学校遺跡—第7次発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会／藤井康隆「伊勢山中学校遺跡—第8次発掘調査報告—」『埋蔵文化財文化財調査報告書38 正木町遺跡（第12次・第13次） 伊勢山中学校遺跡（第8次） 尾張元興寺跡（第9次） 竪三蔵通遺跡（第15次）』名古屋市文化財調査報告51 名古屋市教育委員会／服部哲也 2003「伊勢山中学校遺跡（第10次）」『埋蔵文化財調査報告書48 尾張元興寺跡（第10次） 伊勢山中学校遺跡（第10次） 津賀田古墳 戸田遺跡 NN319号竪群』名古屋市文化財調査報告62 名古屋市教育委員会。

34 高蔵遺跡；村木誠・伊藤厚史 2000「高蔵遺跡（第24次・第25次）」『埋蔵文化財調査報告書34 高蔵遺跡（第24次・第25次） 瑞穂遺跡（第5次） 春日野町遺跡（第2次） 正木町遺跡（第11次）』名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育委員会／山田鉦一 2003「高蔵遺跡第37次発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書47 高蔵遺跡（第35次～第38次・第40次・第41次）』名古屋市文化財調査報告61 名古屋市教育委員会。

35 大喜遺跡；野澤則幸 1989『大喜遺跡—発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会。

36 曾池遺跡；見渡俊一郎・飯尾恭之『南区の原始・古代遺跡』文化財叢書第47号 名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。

37 桜本町遺跡；伊藤厚史編 2000『埋蔵文化財調査報告書33 高蔵遺跡（第22次・第23次） 上島古墳群 守山白山古墳 桜本町遺跡（扇田町60番地地点・第3次）』名古屋市文化財調査報告45 名古屋市教育委員会。

38 楠木町遺跡；木村有作 1996『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会。

39 春日野町遺跡；伊藤正人 2001「春日野町遺跡（第3次）」『埋蔵文化財調査報告書39 西志賀遺跡（第2次） 松ヶ洞14号墳 桜台高校遺跡（第3次） 春日野町遺跡（第3次）』名古屋市文化財調査報告52 名古屋市教育委員会。

40 城遺跡；伊藤正人 1991『鳴海城跡・城遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。

41 西古根遺跡；見渡俊一郎編『緑区の考古遺跡』文化財叢書第69号 名古屋市教育委員会。

42 若王子遺跡；川合剛 2001「原始・古代・中世の集落遺跡、遺物散布地」『豊明市史 資料編補一 原始・古代・中世』豊明市。

43 三ツ屋1号墳周辺；杉崎章 1957「愛知県知多郡上野町三ツ屋1号墳の子持勾玉について」『考古学雑誌』第42巻第3号 日本考古学会。

44 カプト山遺跡；杉崎章編 1974『東海市カプト山遺跡—第二次調査報告—』東海市教育委員会。

45 松崎遺跡；杉崎章編 1977『松崎貝塚』東海市教育委員会／福岡晃彦編 1991『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集（財）愛知県埋蔵文化財センター／早野浩二 2005「松崎遺跡」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県／立松彰・永井伸明 2005『松崎遺跡確認調査報告』東海市教育委員会。

46 法海寺遺跡；渡辺誠編 1993『法海寺遺跡Ⅱ』知多市文化財資料第31集 知多市教育委員会。

47 細見遺跡；伊藤久仁洋 2002『細見遺跡—第4次発掘調査—』知多市文化財資料第35集 知多市教育委員会。

48 天白遺跡；戸田末起他 1999『天白遺跡発掘調査概要報告書』東浦町教育委員会・天白遺跡発掘調査委員会／楠美代子 2002『天白遺跡発掘調査報告書』東浦町郷土資料館調査報告第3集 東浦町教育委員会。

49 神明社員塚；山下勝年編 1989『神明社員塚』南知多町文化財調査報告書第8集 南知多町教育委員会。

50 上ノ段遺跡；森泰通 1990「上ノ段遺跡採集の子持勾玉について」『三河考古』第3号 三河考古刊行会。

51 万加田遺跡；山本ひろみ他 2002『花本遺跡・万加田遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 豊田市教育委員会。

52 梅坪遺跡；杉浦裕幸編 1991『梅坪遺跡—第4次調査概要報告—』豊田市文化財叢書第21／杉浦裕幸 1995『梅坪遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 豊田市教育委員会／杉浦裕幸 1996『梅坪遺跡Ⅲ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 豊田市教育委員会／杉浦裕幸 1997『梅坪遺跡Ⅳ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 豊田市教育委員会。

53 高橋遺跡；矢沢良光 1979『高橋遺跡第九次発掘調査概報』豊田市郷土資料館報告17 豊田市教育委員会。

54 千石遺跡；山本ひろみ編 1999『千石遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 豊田市教育委員会。

55 水入遺跡；永井邦仁編 2005『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。

56 神明遺跡；森泰通編 1996『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 豊田市教育委員会／森泰通編 2001『神明遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 豊田市教育委員会。

57 三味線塚古墳；三田敦司編 2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会。

- 58 矢迫遺跡；鈴木正貴編 2002『矢迫遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 102 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 59 本川遺跡；樋上昇編 2003『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 100 集 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 60 生平遺跡；齊藤嘉彦 2004『生平遺跡』岡崎市教育委員会。
- 61 小針遺跡；齊藤嘉彦編 1999『小針遺跡』岡崎市教育委員会。
- 62 矢作川河床遺跡；荒木集成館 1984『謎の矢作川河床遺物展』集成館パンフレット№ 70。
- 63 高木遺跡；齊藤嘉彦 2003『高木・神明遺跡』岡崎市教育委員会。
- 64 神明遺跡；齊藤嘉彦 2003『高木・神明遺跡』岡崎市教育委員会。
- 65 宮下遺跡；川崎みどり 2003『宮下遺跡』安城市埋蔵文化財調査報告書第 11 集 安城市教育委員会。
- 66 西沢遺跡；鳳来町教育委員会 1967『鳳来町史 文化財編』。
- 67 駒場遺跡；林弘之他 1996『駒場遺跡』豊川市教育委員会。
- 68 天間遺跡；林弘之編 1995『天間遺跡』豊川市教育委員会。
- 69 郷中遺跡；鈴木徹他 1989『郷中・雨谷』豊川市教育委員会。
- 70 欠山遺跡；中村文哉編 1994『欠山遺跡』小坂井町教育委員会。
- 71 白石遺跡；贅元洋 1985「白石遺跡出土玉類について」『ホリデー考古』第 3 号 ホリデー考古刊行会／小島隆 1992「白石遺跡の出土遺物 その 1」『石巻文化財』第 8 号 豊橋市石巻地区文化財保存会／贅元洋 1993『白石遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 豊橋市教育委員会。
- 72 山崎遺跡；小野田勝一・森田勝三編 1993『山崎遺跡』田原町埋蔵文化財調査報告第 6 集 田原町教育委員会。
- 74 保美遺跡；大場啓雄 1963「祭祀遺跡の考察」『武蔵伊興』国学院大学研究報告第二冊 国学院大学／佐々木幹雄 1985「子持勾玉私考」『古代探叢 II』早稲田大学出版部。
- 75 浅井 6 号墳；櫛崎彰一 1963『新編 一宮市史 資料編三』一宮市。
- 76 野見神社古墳；岩野見司 1977「古墳時代」『新編 一宮市史 本文編 上』一宮市／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会／岩野見司・赤塚次郎 1994『日本の古代遺跡 48 愛知』保育社／樋上昇 2005「野見神社古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 77 (伝) 段林古墳；中島義二 1980「大入山第 2 号墳」『旗頭山尾根古墳群・大入山古墳群発掘調査報告書』一宮町教育委員会・新城市教育委員会。
- 78 姫塚古墳；岩原剛 2003「段塚と姫塚—三河における古墳出土遺物の研究 (Ⅲ) —」『豊橋市美術館研究紀要』12 号 豊橋市美術館。
- 79 中野古墳；芳賀陽 2001「中野遺跡」『中野遺跡・東郷内 1 号窯・西上遺跡・伊奈遺跡・野添遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 60 集 豊橋市教育委員会／岩原剛 2005「森岡遺跡 SZ02」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 出川大塚古墳；松原隆治 2005「出川大塚古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 兜山古墳；小栗鐵次郎 1930「上野村名和に於ける古墳」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第八 愛知県／早野浩二 2005「兜山古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 味鏡古墳群；小栗鐵次郎 1935「楠村大字味鏡付近の古墳及遺物」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十三 愛知県／服部哲也 2005「味鏡古墳群」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- ※文献の収録については、集成の対象とした県内の遺跡・古墳のみを対象とした。県外の遺跡・古墳については、埋蔵文化財研究会 2005『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』などを参照。

挿図典拠（遺跡文献一覧を参照）

- 図 2—1 ～ 14・20；愛知県 2005『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』、15 ～ 19；芳賀 2001 より作成。
- 図 4—5、7、13、14；樋上編 2002 より（6、8、9 ～ 12、15 は未報告資料）。
- 図 5—1、2、19；伊藤 1991、3、30；森編 2001、17；森編 1996、4 ～ 6、8、11、22、23、28、32；永井編 2001、9、31；樋上編 2002、25；樋上編 2003、33；山本他 2002、34；三田編 2001 より作成。
- 図 6—2；森 1990、4；贅 1985、5；森編 2001 より作成。
- 図 8—1；森編 2001、3；石黒編 1999 より作成。